

〔71〕 ジョン・クイマイヤー 時代への深い認識

『眠れる森の美女』 『ニジンスキー』 『冬の旅』

2005年2月12日 東京新聞 夕刊

正統的なバレエの流れを汲む三人の現代振付家としてフォーサイス、キリアン、ノイマイヤーは並び称されることが多いが、なかでもノイマイヤーは古典の骨格を持ったドラマティックなバレエを創作する点で、他のふたりの先鋭な先見性とはやや性格を異にすると見なされてきた。

しかしノイマイヤーが率いるハンブルグ・バレエの今回の来日公演は、上演された三演目『眠れる森の美女』『ニジンスキー』『冬の旅』のいずれにおいても、時代への深い認識がうかがわれて、ノイマイヤーならではの現代性、同時代生を感じることができた。

*

『眠れる森の美女』はバレエでは最も知られた古典の一つ。プティパによる原典（一八九〇年初演）ではヒロインが眠り続ける百年を一七世紀から一八世紀にわたる期間としている。チャイコフスキーの音楽もその時代差と様式を考えて作曲されているが、今回のノ

〔71〕 ジョン・クイマイヤー 時代への深い認識

『眠れる森の美女』 『ニジンスキー』 『冬の旅』

2005年2月12日 東京新聞 夕刊

クイマイヤーの改訂版は、その新旧二つの時代を現代と一九世紀末に設定している。

ジーパンをはいた現代青年が森の中でタイムトンネルに迷い込み、古めかしいロイヤル・ファミリーの姫君の誕生パーティに出くわす。そこで催される余興にはプティパ原典の踊りが用いられ、現代バレエとプティパの時代のバレエとが対比されて、時の流れを感じさせるといふ仕組みである。プティパ振付とクイマイヤー振付が交錯する舞台は、演劇的な重みのある情景を幻想の枠組でつつんで美しいが、それ自体がバレエ史への具体的な歴史批判になっていて興味深い。

*

『ニジンスキー』は世界的な名声を博した天才ダンサーの生涯を描く二幕バレエである。ヨーロッパといわず全世界で一世を風靡したバレエ・リュウスのスターは、私生活でも謎の多い人物だったが、ことバレエに関しては、その活躍の短い期間を通して、片や古典バレ

〔71〕 ジョン・ノイマイヤー 時代への深い認識

『眠れる森の美女』 『ニジンスキー』 『冬の旅』

2005年2月12日 東京新聞 夕刊

エの稀代の名手であり同時に時代を先駆ける振付家でもあった。

ノイマイヤーは、おそらくは同じ舞踊人としての共感から、一人の人間のなかに存在した時代の乖離かいりに着目する。ダンサーとして、また舞踊作家として異なる時代を生きる人格の分裂は、妻ロモラの眼にさえ、何人ものニジンスキーを生むことになる。その多人格性を舞台化するためにバレエ『ニジンスキー』は、主役の周囲に彼と深い関係を持った人々や、彼の苦悩する分身、踊った役柄などを絡ませ、天才の光と影、虚と実の交錯する絵模様を描く。

それだけではない。第一次世界大戦の国際関係に翻弄され、更なる苦境に追い詰められるニジンスキーを通じて、まさに現代の先行き不透明な状況をも暗示するのだ。登場人物の交流するさまも表現力が豊かで説得性があるが、さらに抽象的な心理状況を描くグループの踊りが創意にあふれ、見応えがあった。

〔71〕 ジョン・ノイマイヤー 時代への深い認識

『眠れる森の美女』 『ニジンスキー』 『冬の旅』

2005年2月12日 東京新聞 夕刊

*

『冬の旅』はよく知られたシューベルトの歌曲を、ハンス・ツェンダーが現代的な精神解釈と音楽技法でオーケストラ編曲した、その音楽に振り付けたバレエである。

純粹なるがゆえに人とのつながりと温もりを失った孤独なさすらい人を、ノイマイヤーは異文化の衝突とテロの恐怖に揺らぐ現代のものとして描く。

服部有吉を主演として振り付けた時にノイマイヤーのなかにあった無垢と孤絶のイメージは、ロマン派的『冬の旅』とは少々異質だが、それに優る説得力を持っている。もう一人のさすらい人を初演と同様ノイマイヤー自身が踊って、ふたりの重奏と隔絶を感じさせ、奥行きを感じさせる。振付はシャープで斬新な切り口を持ち、装置や演出にも工夫があって、感銘の深い作品だ。